

## 2013年 vol.3 特集 シリア危機



1.国境を越えイラクへと向かうシリア難民たち 2.シリア国内の子どもたち。UNHCRはシリア国内で避難する人々に配布する人道支援物資をパートナーである赤新月社に提供した 3.レバノン南部でシリア難民が生活する居住地。テントはビニールシートと木材で作られている 4.家族の大きな荷物を運びながらヨルダン国境を越えるシリア人の少年 5.トルコ政府は条件を満たしたシリア難民にトルコの大学に入学許可をすると発表。タマラ(左)とエリアダのシリア人姉妹は大学入学申請を出すことに決めた

### シリア周辺国の状況

**レバノン**・・・シリア危機発生以来、シリア難民を受け入れてきた結果、人口が10%も増加。難民の多くを1200以上の自治体が受け入れているがキャンプがないため、住宅のニーズが急増している。

**ヨルダン**・・・多数の難民の流入によりインフラや食糧、医療、教育などに大きな負担がかかっている。首都で生活する都市型難民も多い。

**トルコ**・・・キャンプに加え、難民が急増し難民キャンプを21ヶ所増設してきたが増え続ける都市型難民への支援も課題である。

**イラク**・・・イラクにはもともと100万人の国内避難民が存在する上に、20万人近いシリア難民が同国へ避難。この状況を受け、イラク北部では2013年10月に新しいキャンプが開設された。

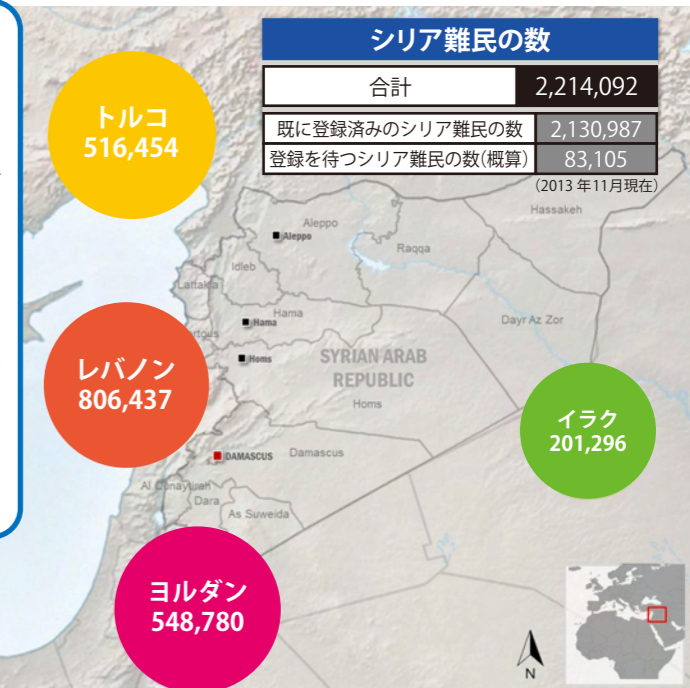
**エジプト**・・・エジプト国内の政情の混迷が深まる中で、エジプト国民およびシリア難民の生活環境が悪化している。またエジプト政府はシリア難民に対して入国要件を厳格化している。

### シリア難民に関する最新情報はこちら

<http://data.unhcr.org/syrianrefugees/syria.php>

エジプト  
126,166

ヨルダン  
548,780



### 【日本政府、企業からの貢献】

シリア危機が悪化、周辺国が難民を受け入れ続け国際社会に対する責任の共有が声高に叫ばれる中、日本政府はシリア難民支援として、周辺国でのUNHCRの活動に対して2013年に4192万米ドル、シリア国内における活動に対しても580万米ドル、合計4772万米ドルの資金協力を実施。7月末には、岸田外務大臣がヨルダン訪問時、12万人が避難生活を送るザータリ難民キャンプの現状と課題を視察した。9月末の国連総会で、安倍総理大臣により、6000万ドルの対シリア支援の追加表明がなされた。



ユニクロを展開するファーストリテイリングは、シリア周辺国へ逃れた難民とシリアの国内避難民支援のため、UNHCRとパートナーシップを結ぶ企業による寄付の中でも最高額となる100万米ドルを拠出。昨年届けられた冬物衣類19万着に加え約176万着の衣類が空輸と船便で支援現場に届けられる予定。

### 【ヨルダン：都市型難民の課題】

2013年9月、国連UNHCR協会の使節団は、ヨルダンに逃れたシリア難民の状況を視察した。難民は必ずしも、難民キャンプに逃れているばかりではなく、その大多数は、国境から首都アンマンまで広範囲に避難しており、「都市型難民」として、親戚や知人の家に身を寄せたり、高騰する家賃をなんとか捻出して避難生活を送っている。紛争が長引き持参した資金も底をつき状況は逼迫している。難民キャンプにいれば、食べ物の配給や家賃の心配もなく子どもたちの教育の機会も確保されているが、あえてキャンプを選ばない人に尋ねると「自分たちだけで自由に家族で過ごせるのがいい」と口をそろえる。シリア危機は、ヨルダンに限らず、レバノン、トルコ、イラクも「都市型難民」の問題に直面し、受け入れ側の限られた公共サービスへの多大な負担が課せられ、周辺国が国境を開放し続けることにも限界に近づきつつある。

日本から、シリア難民の苦しみや周辺国の負担を緩和するため、国連UNHCR協会では、「アクション!シリア」キャンペーンを行っています。  
URL [www.japanforunhcr.org/syria/report.html](http://www.japanforunhcr.org/syria/report.html)



### UNHCR駐日事務所新旧代表ごあいさつ

#### ヨハン・セルス前UNHCR駐日代表から離任のごあいさつ

日本での5年の勤務は感謝の思いで一杯です。日本政府の皆様とは、世界各地で頻発する難民問題解決に向けた様々なご支援や、アジア初となる第三国定住が始動する機会を共に進め、思い出深いものとなりました。JICAとはパートナー連携をさらに深め、逢沢一郎会長をはじめ、UNHCR国会議員連盟のご尽力で世界初の国会決議案\*が難民条約60周年の節目に採択されました。NGOの皆様とも活発な議論に関わることができたことは、ジュネーブ本部でUNHCR執行委員会事務局長に就いても、継続することができよう。国連UNHCR協会との二人三脚を通し、より多くの難民がHOMEを得ることができたと感謝しています。またこれからも日本は私にとっての第二のHOMEであることには変わらず、すでにホームシックになっております。皆様に改めて感謝申し上げます。



前 UNHCR 駐日代表  
ヨハン・セルス

#### 新しく着任したマイケル・リンデンバウアー駐日代表からごあいさつ

はじめまして。10月に着任致しましたマイケル・リンデンバウアーです。着任前はドイツ・オーストリア地域事務所の代表を務めておりました。これまでオーストリア、ドイツ、香港、ハンガリー、チャンマー、アイルランド、スリランカ、スイス、スーダンなどで法務官として活動をして参りました。UNHCRは日本で採択された難民支援に関する国会決議に則し、日本政府、NGO、市民社会、学術機関など様々なパートナー組織とともに難民支援の取り組みを強化してきました。これまでの日本政府、国民の皆様からの多大なご支援に心から感謝申し上げます。避難を余儀なくされた人々の苦しみをやわらげ、恒久的な解決策を見出すために今後も皆様のご支援とご協力を宜しくお願い致します。



第11代 UNHCR 駐日代表  
マイケル・リンデンバウアー

**冬に向けた支援**  
冬に向けた防寒対策は急務である。UNHCRはパートナー団体と連携し、防寒のためのテントの補強、毛布やストーブ、石油、防寒着などを備え、冬を乗り切るために欠かせない物資を難民キャンプに届けている。また、難民キャンプ以外の場所でも生活している難民、シリアの国内避難民も支援対象である。

**シリア国内避難民への支援**  
650万人を超えると思われるシリアの国内避難民への支援も課題である。UNHCRは地元支援団体などと連携して支援物資を届ける活動を続けているが、2013年末までに国内避難民は680万人に上るとされている。

**安全な避難路の確保を国際社会に要請**  
欧州へと避難するシリア難民が増加しているが、その道のりは危険をともなう。UNHCRはシリア難民の避難路の安全が確保されていないことを憂慮し、国境解放を国際社会に要請している。国際社会がシリア難民受け入れ国に対して経済的支援を引き続き行うことは重要だが、一方で難民保護上の人道的配慮、第三国定住、家族の再統合、柔軟なビザの発給といった取り組みによって連帯を示すことも求められている。

**シリア、とどまることを知らない人道危機**  
内戦の発生から2年以上が経過し、なお先が見えないシリア。未だに政治的な解決の見通しが立たず、紛争が収まらない限りシリア難民は今後も増加し続け、2013年末末には、シリアの人口の半分が人道的支援を必要とする予想される。すでに大規模な難民流入により周辺諸国では資源・インフラに大きな負担がかかっている。また100万人を超えるシリアの子どもたちが教育の機会を失い、かわりに労働に従事したり、武装グループからの勧誘を受けるなど過酷な状況に置かれている。

\*難民の保護と難民問題の解決策への継続的な取り組みに関する決議

# The Most Important Thing あなたの一番大切なものは 何ですか？



6月にUNHCR駐日事務所が始まったフェイスブックの連載企画「一番大切なもの」が広がりをみせている。UNHCR本部のウェブサイトで始めたこの取り組みは難民の人々が実際に持ってきた「一番大切なもの」を写真に収めたもの。日本版では参加者自身が難民になったと仮定して、一番大切なものを考えてもらいそれをフェイスブックで定期的に紹介している。難民の境遇に思いをめぐらせ、共感する。そんな意図がこの企画には込められている。

故郷を離れて避難するとして、何を携えていきますか？

## 緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で



©UNHCR/P.Moutizis  
1995年、ザイール（現コンゴ民主共和国）のルワンダ難民を訪問する緒方貞子 第8代国連難民高等弁務官

今年の夏、とても反響の大きかった番組、「NHKスペシャル：緒方貞子 戦争が終わらないこの世界で」ご覧になりましたか。UNHCRはジュネーブ本部、ルワンダ事務所、駐日事務所に加え、スウェーデンで行われた緊急事態対応ワークショップなどで取材協力をしました。

東西冷戦崩壊後の激動の1990年代に、第8代国連難民高等弁務官としてUNHCRを率いた緒方貞子さんが、あの時どのような思いで度重なる難民危機に向き合い、決断に至り、人道援助に尽力したか。緒方さんの幼少期からの経験や、UNHCR元同僚から明かされる知られざる姿などが、貴重な映像・資料などをもとにドラマとドキュメンタリーを織り交ぜて描かれました。

# Topics

## 日本への第三国定住 ミャンマーから4家族が成田空港に到着

第三国定住によるミャンマー難民18人が9月、成田空港に到着した。到着したばかりの家族は、報道陣のカメラに笑顔を見せながら空港の到着ロビーを通り抜けた。

第三国定住プログラムで到着したのは、主にタイのヌポ、メラマルワン、メラウー難民キャンプで生活していた4家族、計18人。この中には0歳から15歳までの子ども10人が含まれている。今回は、受け入れ対象となる難民キャンプが拡大され、新たにメラマルワンとメラウーという2つの難民キャンプが加わり、それぞれのキャンプから難民を迎えることとなった。

4家族は現在、政府の委託を受けて難民の定住支援を行なっている「難民事業本部（RHQ）」の定住支援施設で日本語教育、社会生活適応指導、職業紹介など、日本で新たな生活を送るための研修を受けている。



©UNHCR/A. Kitagawa  
第三国定住で成田空港に到着したばかりの家族



©UNHCR/C. Imazumi

## アンジェリーナ・ジョリーUNHCR特使 紛争下の性的暴力抑止についてスピーチ

7月29日、国連大学でアンジェリーナ・ジョリー監督の映画「最愛の大地」の試写会が行われた。英国のヘイグ外相とともに「紛争下の性的暴力抑止」の活動を行っているジョリー特使がスピーチを行った。「友人や隣人として平和に暮らしてきた人たちが、一体どうして互いを攻撃するようになるのか。すべてを失うとはどういう事なのか、映画という方法を通じて見極めようと思いました。皆さんにこうした問題をもっと考えて欲しいそれが私の願いです。」



©UNHCR/C. Imazumi  
1.国連大学でスピーチをするジョリー特使  
2.監督作「最愛の大地」のポスターの前で

## インタビューのチカラ

UNHCR駐日事務所はインターンの力に支えられています。今回は「思い立ったが吉日」が信条、パワーと笑顔に満ちあふれた石田理加さんをご紹介します。

震災後立ち上げたNPOでの活動を進めていく中で、情報発信の仕方や運営方法など学びたい事が沢山あったのでインターンに応募しました。また映画『海と大陸』を観て難民への関心が高まったこと、震災後日本で家を追われた人への支援など、自分の中での関心がUNHCRと結びついたからです。

業務は主に記事の翻訳、作成、問い合わせへの対応など広報全般に関わる仕事をしました。難民映画祭ではオープニングの式典で通訳を担当させてもらうなど、想像していたよりも責任のある仕事も任されて驚きました。仕事、NGO、インターンとそれぞれの体験が相乗効果を発揮し、以前より良いアイデアを思いつくようになりました。また「人にチャンスを与えることが人を育てることにつながる」という大事なことを学びました。年の離れた学生の方々に色々教えてもらいながら仕事が出来たのも楽しかったです。今は本業の仕事も続けながら、自分自身がUNHCRでチャンスもあって成長したように、ボランティアの育成にも励みたいと思います。



©UNHCR  
石田 理加 (広報担当)  
航空会社で客室乗務員として勤務する傍ら、東日本大震災後NPOを立ち上げ活動中

## 【職員インタビュー】

伊藤礼樹 UNHCR ミャンマー 事務所代表代行  
人道援助の意味、必要性、正当性を真剣に考えたい

現在はミャンマー事務所の代表が離任し、新しい代表が赴任するまで代表代行としてミャンマー国内にある12のUNHCR事務所のオペレーションを総括しています。日本からのミャンマーUNHCRの活動への支援は大変大きく、深く感謝するとともに、日本人の職員としてしっかりと結果の出せる仕事ができるように頑張っています。

これまでミャンマー、スーダン、アルメニア、レバノン、ソマリアなどで活動してきました。やりがいを感じるのは現場で結果が出る時です。特に難民の第三国定住が決まったり、帰還民や避難民を迎える時などは「UNHCR冥利に尽きる」と感じます。一方で課題も感じています。根本的に人道援助という概念・活動体系自体が曲がり角に来ているような気がするのです。自然災害や紛争があると多くの国連機関とNGOが現地に集います。それに伴い複雑な調整メカニズムができ、調整会議への出席、戦略作り、合意文書の作成などの過程が重視されるような一面があります。諸活動のマニュアル化が進み「智慧があり、柔軟性、創造性に富むリーダー」が少なくなってきたような気がします。人道援助の産業化と官僚化といかに向き合い、現場で即効性のある結果が出すか。今後は、人道援助の意味、必要性、正当性を真剣に考えて自分なりの立場を構築したいと思います。



©UNHCR/Jane Gabriel Holloway  
タイ国境カヤ州の山奥の村で帰還民から話を聴く

## 第8回UNHCR難民映画祭が開催



1.「シリア 踏みこじられた人々と希望」上映後のトークショー 2.バリアフリー上映の入場者を誘導するボランティア 3.オープニング会場のイタリア文化会館は人の波 4.難民映画祭のボランティアスタッフ



「映画を通して問題を知る」から具体的な行動喚起へ  
「描かれていることは、どこか遠い国の出来事ではない」。今年で第8回を迎えたUNHCR難民映画祭が、9月28日(土)から10月6日(日)の期間都内七ヶ所の会場にて行われた。この映画祭は難民問題の認識向上を目指し、国内外問わず難民に関する映像作品を無料で上映するもの。「難民問題を知る」という例年のコンセプトに、今年は「問題に対して何が出来るかを共に考える」という歩進んで行動に結びつけようという提案が加わった。

オープニング作品はシリア内戦をテーマにした作品  
今年のオープニング作品はシリア内戦をテーマにしたドキュメンタリー「シリア、踏みこじられた人々と希望」。シリア国内とトルコの難民キャンプで行った約30人のシリア難民へのインタビューをまとめた作品で、初日、最終日いずれも満席。上映後にはNGO職員やトルコ大使館員を迎えてのトークショーが行われた。訪れた観客からは、「日本では中々触れる機会のないシリアの現状を知ることが出来た」、「自分が何が出来るとかを考えた」などの声が聞かれた。

新しい試みー大学との連携、バリアフリー上映  
明治大学で上映された「異国に生きる」では視聴覚障がい者向けに音声、字幕、字幕カイドを用意したバリアフリー上映が開催され、当日は事前に研修を受けた学生ボランティアが協働団体のシテイ・ライツのメンバーと共に来場者の誘導を行った。早稲田大学では「流された」の上映が、岩井雪乃早稲田大学助教授の授業の二環として一般にも開放。上映後映画の背景や、同じく早稲田大学准教授の陳天璽氏から無国籍者の問題について講義が行われた。年々進化を遂げる難民映画祭から来年も目が離せない。